



TITLE:

図書室と私

AUTHOR(S):

CITATION:

図書室と私. 静脩 1965, 2(1): 3-3

ISSUE DATE:

1965-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36260>

RIGHT:

図 書 室 と 私

黄 敏 展

私が京都大学農学部に初めて研修員として来てから、もう3年半余りになる。この間に修士課程を修了して博士課程に入った。この短くない間、今考えてみると、農学部の図書室には大変御厄介になっていた。一番図書室が必要になるのは、自分の専門に関する文献を探す時である。特にゼミナールの時はかならず図書室に頭を突込む。私の見たい文献には時々戦前の古いものがある。このような古臭い文献だと一般の書架にはなく、書庫の奥深く置かれているが、係員はいつも心よく、すぐ探しに行ってくれる。時には30分以上も書庫で探してくれる。そしてやっと目的の本を持って出て来た時は、本当に感謝の気持ちで一ぱいであつた。係員はこの3年半の間に3人、4人と変ったが、この親切な態度はどの係員も変らなかつた。大変よいことで、私達学生は非常に助かっている。

本部の附属図書館より離れている私達農学部の学生は、図書室がやはり唯一の共同読書の場所であり、いこいの場所でもある。学部の一・四回生だけでなく、大学院生や研究生にとって、図書室は忙がしい研究や実験から一時的に逃避するところでもある。ここには新聞、一般雑誌や週刊誌あるいは自分の専門外の専門誌が置かれている。いつ行ってもなにか手に取って読みたい本がある。以前私が来た当時は、なんとなく落着いて図書室で本を読む気にはならなかったが、去年の夏、全面的に図書が自由に見られるような配置がえがなされて、よりよい読書の場所になり、気軽に利用するようになった。本も、専門外のものを書架より自由に取り出してページをめくるようになった。特に入口の右側にある雑誌に囲まれた円卓は、逃避の場所として一番よいと思う。このように図書室は、年々私達学生によりよく利用されやすいよう改善されて来た。私として欲をいえば、一般的な雑誌や週刊誌の種類を増すことができ、壁を白く塗り替えて、より明るい部屋にすることができたらと思っている。

(農学部大学院学生)

今 城 扶 美

私が本にとりつかれたのは中学校時代であつた。3年間を過ごした広大附属中の図書室は開架式であり、中学校にしては蔵書も多かった。教室から近くて気軽に行け自習時間によく利用した。自由に本を手にとり、2・3ページ読んだり、写真や図だけ拾って見たりした。特に私の興味をひいたのは小説、特に外国小説、探偵小説、空想科学小説と自然科学系統の本であつた。何でも手当たり次第、無我夢中で読んだ。もう一つの大きい魅力は、新聞、雑誌が豊富に用意されていることであつた。放課後、あるいは自習の時、雑談しながら次々と読みあさつた。

全然深く考えずただ筋ばかり追う興味本位のものではあつたが、私はそれが、全く無駄であつたとは思わない。中学生の私にとって本は最大の喜びであり、図書館はいこいの場で親しみやすい場であつた。

高校生となつてからは、乱読より熟読になり読む本も減少した。しかし、大手前高校へ転入するやいなや、急に図書館から遠ざかってしまった。それはただ単にその形式が閉架式であつたからである。慣れないために本を貸りるのがおっくうになり、2、3冊読んだきりやめてしまった。

この体験から図書館の形式は重要だと思う。現在の教養部の図書室も私にとっては何となく行きにくいものだ。

だからできれば開架式にしてほしい。本の間を歩きまわり、どんな本があるかを知り、どれを読むか迷い、手にとって友達の見聞を聞くのはどんなに楽しいだろう。

また私は図書館を、自習の部屋にするのは、間違いだと思う。別に自習室のような独立した部屋があるべきだ。図書室は、少しくらいなら話のできる新聞や雑誌、週刊誌なども気軽に読める、親しみやすいいこいの場であつてほしいと思うのは中学生的思考方であろうか。(農学部・一回生)

ダ ン テ 図 書 展

— 一生誕700年記念 —

と き 6月14日—17日

ところ 附属図書館陳列室